「神の現臨を計算に入れる」(2026.2.15)

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、
わたしたちは知っています。＜ローマ＞8:28

仙台で牧会していた頃、東神大の後援会があり、当時の学長・近藤勝彦先生が来られ、講演と近況報告をされた。その講演の内容が素晴らしく、改めて共に分かち合いたいと思う。現代の不安の原因は、ずばり「神が共に働いておられる」ということを、「計算に入れていない」ところにある、と。内容そのものの新しさではなく、その表現である。「計算に入れていない」という、生活に密着した言葉のために、腑に落ちたのである。

私たちは伝道など教会の営みはもちろん、日常の営みにおいても聖霊が働いてくれるように祈りをもって準備する。それでも、お金は大丈夫か、人は集まるか、天候は大丈夫か、など不安は尽きない。その時、神が共に働いておられることを、一息ついて「計算に入れる」ことで、確かに安心感が広がる。

また近藤先生は上掲の御言葉にあるように、摂理の信仰の回復が急務だとも述べておられた。御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く、という信仰である。「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。」(マタイ 10:30) とイエス様が教えられたように、この摂理の信仰は、天の父が人に最大の関心を寄せておられ、「万事が益」になるよう働かれておられる、と信じることである。

横手教会に次期牧会者が与えられるように私たちは祈ってきた。1 月末時点で東神大から紹介がなく、不安の中で招聘委員会は次年度の体制をどうすべきか検討に入った。このような時だからこそ、万事を益にされる神を「計算に入れ」、心を高くあげたい。エレミヤ 29:11 で約束されているように、将来と希望を与える計画を神は立てておられるのだから。